

四旬節（喜びへの招き）

イズコ神父

教皇フランシスコの「福音の喜びの勧告」に基づいて、復活の神秘に向かって一緒に考えてみましょう。

その、勧告の序文から喜びへの招きが響きます。最初の言葉ですが、「福音の喜びは心を満たし、イエスに出会う人の命全体を満たします。イエスの福音を受け入れる人々は罪や悲しみ、内なるむなしさ、孤独から解放されます。イエスキリストと共にあればいつも喜びが生まれ、又改めて生まれてきます。この勧告で私は信者の皆さんに言葉に向け、その喜びによって刻まれた新しい福音宣教のステージへと招き、これからの教会が進める行進のための道を示したいと思います。」

教皇フランシスコは又、「現実の世界に目を向けてみると、現代の人々を苦しめている多くの危険の中で、悲しみに陥るといふ危険が一番大きな危険ではないでしょうか」と言っています。それでは、その悲しみはどこから生まれてくるのでしょうか。欲張りの心から、安楽を求める心から、浅い楽しみを探し求める心から生まれるのではないのでしょうか。実際、そのような心であれば、他人のために、貧しい人のために割く心の場所がありません。

神の声に耳を傾ける時間もない、

神の愛を喜び味わう時もない、

善を行う熱心も消えるでしょう・・・

その危険（悲しみに陥る危険）は、全ての人を狙っているでしょう。そしてその危険に陥る人は少なくありません。信者の中にも幾人かは復活祭抜きの四旬節のようにみえる生き方を選択しそのように生きる生き方を選ぶキリスト者もいます。（N6）

でも、何度も「いつも喜んでいなさい」と言うパウロの言葉で歌っていても、あるときに辛いこと、大きな不幸が訪れるとその喜びはどうなるのでしょうか……。その様な時でも、愛されていると言う事実は消えないで、私たちを支えて下さるのです。その時でも信頼の光、喜びの光を目指し、全てを神様に委ねて祈ることができるでしょう。たとえば次の聖書（哀歌3，17～）の言葉をもって、「私の魂は平和を失い、幸福を忘れた。しかし、心を励まし尚、待ち望む主の慈しみは決して絶えない。主のあわれみは決して尽きない。それは朝ごとに新たになる。あなたの真実はそれ程深い。主の救いを黙して待てば、幸いを得る。」

主を通して復活されたキリストとの出会いによって私たちの喜びの泉はいつでも新たにされます。その出会いは色々な方法で行うことができます。聖書に基づいた教皇フランシスコのまとめによるキリストにであう二つの大事な方法を思い出しましょう。祈りと愛の技。祈りです。祈り方は色々ありますが、祈りを忘れたら、一番大事なことが分からなくなってしまうでしょう。信仰の喜びが消えるでしょう。どのようにして互いに愛し合うことが出来るのでしょうか、生きる目的も弱くなってしまうでしょう。祈りましょう！一人でもいい、グループでもいい、どこでもいい、自分の言葉でもいい、他人の言葉でもいい、沈黙でもいい、歌ってもいい……。祈る人は孤独にならない。

愛の技です。何回でも質問して下さい。今私を必要としている人は誰。四旬節の「断食」、聖書の朗読、祈りへの招き……。全ては「隣人を愛するように」と導いてい

ます。そこにはイエスの福音の中心。その心を作りましょう。その様な教会を目指しましょう。赦しとあわれみの教会。小さな人に出会うことができる教会。皆さんと対話ができる教会。全ての人間の内に神の子を見る教会・・・。

今からの四旬節の間、主イエスに出会いましょう。せめて主イエス自身が私に出会うことを妨げないようにしましょう。「見よ、私は戸口に立って叩いている。誰か私の声を聞いて戸を開ける者があれば、私は中に入ってその者と伴に食事をし、彼も又私と伴に食事をするであろう。」祈り、愛の技、イエスとの出会い・・・喜び一杯の四旬節を！